都道府県別賞一等

言葉の温もりと、変わりゆく安心

兵庫県　南あわじ市立三原中学校　二学年

安田　光希

「簡単な手術だから大丈夫だよ。朝出かけて、夕方に帰ってこられるからね。」

今年の春、父親は心配をかけないように笑顔で一人、病院へ向かって行った。父親が手術を受けるのは、生まれて初めてのことだったので、父親は軽く言ったけれど、自分は父親が出ていくのを見ながら『大丈夫かな。』と強く心配になった。「簡単な手術」なんて、本当にあるのだろうか。「大丈夫」と言えば言うほど、父親が不安を隠そうとしているようにしかみえなかった。その日は学校でその手術が無事に終わったかが気になってしまった。その日の授業はまともに集中することができなかった。『無事に終わるだろうか。今ごろどうしているだろうか。』時間が経つのが何倍にも長く感じた。放課後、部活が終わって家で父親の帰りをまっていると少し疲れて帰ってきた。「おかえり。」と言った後に足を見ると真っ白な包帯が巻かれていた。「足は縫ったからちょっと痛いけど大丈夫。」と言われたときはもう大丈夫なんだと安心した。いつも居る父親でも、手術をするとなるとこんなにも心配してしまうんだな、と思った。

しかし後日、家でちょっとした事がおこった。父親の手術後の手続きで生命保険の給付請求をしたところ、今回の「日帰り手術（入院）」では、給付金が支払われないことが分かった。毎月保険料を払い続けてきた母親は、少しがっかりした表情を見せていた。自分も『助け合いの保険なのに、どうしてこんなときに役立たないんだろう。』と、感じてしまった。

でも、父親と母親の話を聞くうちに、自分の考えは少し変わっていた。

昔は一度入院すると何週間も病院に泊まるのが当たり前だったけれど、今の医療技術は大きく進歩している。体に負担の少ない手術ができて、入院の期間は短くなって通院スタイルも増えている。つまり、医療が進化したからこそ、昔の基準で作られた保険ではカバーしきれない部分があった。

『保険に入っているからもう大丈夫。』と思い込むのではなくて、医療技術の進化に合わせて、内容を見直すことの大切さを自分は今回の出来事で初めて知ることができた。

その後、両親は我が家の保険を見直し、今に合った保障に加入し直した。今回の保障と「ガン保険」、「死亡保険」、そして将来のために「貯蓄型の保険」も追加した。

家族を守るための備えを整え直した父親と母親は、とても安心しているよう

にみえた。

あの時父親が言った「大丈夫」という言葉。それは強がりじゃなくて、家族を心配させたくない親切さだと思う。新しく保険に入って家は確かな安心に包まれている。

変わっていく世界の中で、家族を守るとはどういうことか。父親の小さな手術と真っ白な包帯は、未来に備えることの本当の意味を教えてくれた。